

大西秀之著、『技術と身体の民族誌——フィリピン・ルソン島山地民社会に息づく民俗工芸』、昭和堂、2014年、274頁、6,600円+税

板垣 順平

本書は、東南アジア島嶼部に位置するフィリピン・ルソン島山地民社会の土器づくりや機織りといった民俗工芸の技術的实践に関する民族誌である。観察や聞き取り調査といった既存の民族誌的調査手法では捉えることが難しい身体の実践が、市場経済や開発事業との接触によって、どのように変化したのかについて人類学的な視点から考察しているところに本書の特徴がある。評者は、東アフリカのエチオピアの機織り技術や織工の生業、社会関係について民族藝術学的な調査研究をおこなったのちに、国際協力機構(JICA)の短期ボランティアとしてエチオピアで工芸技術を利用した土産物の開発にも携わってきた。ここでは、本書の全体像を概略的に紹介したあと、本書の後半部分の工芸技術の変容(地場産業としての機織りや産業化による変容)と伝統工芸の再生に関わる章を中心に、民俗工芸の実践と開発実践との接触によって変化する人々の実践に着目して民俗工芸について検討したい。

本書は著者がこれまでに発表した論文8編をもとに、加筆修正して出版されたものであり、以下のような章別構成となっている。

- 第1章 技術をモノ語る苦難と悦楽
- 第2章 技術を語る民族誌の新たな地平
- 第3章 社会に形作られた土器製作の身体
- 第4章 土器製作者の誕生とジェンダーの再生産
- 第5章 社会的実践としての工芸技術の変容
- 第6章 市場経済による伝統工芸の再生
- 第7章 民族誌から展望する技術研究

第1章の冒頭で著者は、日常行為の一つひとつが「技術」であり、「技術」研究は人類学だけでなく、人文社会科学のなかで共有されているテーマや課題にも接合する可能性を示唆しながら論を進めている。また、著者は「コトバによって技術を捉え理解するのではなく、モノに働きかけるヒトの通常言語化されない実践として技術を読み解く(23頁、以下引用ページ数のみを記載)」ことを本書の指標としている。

第2章では、本書の重要なキーワードとなっている「技術的实践」をより捉えやすくするために、「技術的实践」、「技能」、「技法」、「技術」のような類義語を改めて整理し、定義している。また、本書の視座となっているフランス人類学やプロセス考古学を参照し、技術は一定のものではなく、身体や環境と同期されるものであると述べている。これらが変化すれば、おのずと技術も変容しうるものであることを追記し、技術研究の方向性や可能性を示唆している。

第3章から第4章は、著者が1996年にルソン島コルディリエラ地方のピラ村において実施した土器づくりに関する現地調査をもとに、技術的実践に関する記録が主となっている。ピラ村では、9-10種類の工具と15の作業工程によって土器づくりが実践されている。著者は、これらの道具の特徴やそれぞれの作業工程について実作者の視点から詳細に説明している。また、単なる製作技術の記録にとどまらず、粘土の調合や成型作業、余分な粘土の削り取り、焼成など、製作者の経験や感覚などを必要とする工程について記録している。なかでも、作業姿勢や身体の使い方は、たとえ合理的ではなくても、師から教わった方法が正しい方法として継承されていく。そして、あとから他の技法を提示されたとしても（それがもっと合理的な方法であったとしても）製作者にとっては違和感を覚えるだけとなる。また、技術の習得は、製作者が幼少期に粘土遊びや手伝いをしながら、基礎的な土器づくりの技術を習得し、後に作業姿勢や身体の使い方を体得していく。このように土器づくりを事例として身体の実践と製作技術の関係性について論を進めている。

続く第5章から第6章では、コルディリエラ地方で行われている機織りの技術や近代化に伴う技術の変容について記述されている。この地域で使用される織機の形態は主に「腰とタテ糸保持具(杭や棒、杵など)でタテ糸に張力をかけるとともに、腰でタテ糸の張力を制御する仕掛けを備えた」(吉本 2013: 35) 腰機である。従来はこの腰機を使って地域や民族によって異なる色彩や文様を施した織布が製作されていた。しかし、行政機関や企業資本によってこの地域の機織りが産業化されると、ランチョンマットや財布、サイドポーチなど、観光客を対象にした土産品に使用する布も織られるようになった。このような産業化は、織布の種類を多様化させただけでなく、「足踏み式のソウコウが設置され、タテ糸保持具(布巻棒や杵など)でタテ糸に張力をかけるとともに、布巻棒でタテ糸の張力を制御する」(吉本 2013: 42) 高機が用いられたり、縫製についてもミシンが使用されるなど、製作技術も変容することとなった。本書では、その事例として、コルディリエラ地方のなかでも特に機織りが盛んにおこなわれているサガダ、サバガン、サモキの3地域の機織りの状況について報告している。

また、機織りの技術の習得方法は、「熟練者と一緒に作業を実践するなかで、見よう見まねや自主的な質問などを通して技術を自ら学び取ってゆく方法」(168)と「それまでの個人個人の経験にいっさい関係なく、訓練=教育を行うことによって達成される、近代の学校教育に類似した」(169)方法の2種類がある。とくに、後者の技術の習得方法は、産業化、あるいは近代の学校教育的なシステムの導入によって多様化していると著者は述べている。

第7章では、これまでの土器づくりや機織りの技術の記録を通じて検討してきたコトバと技術の関係性について記述している。そして、民俗工芸の技術だけではなく、近代科学技術までを視野にいれて、技術的実践を対象とした研究は「現地の人びとの社会的実践を支えている知識と技能を、民族誌家が自らの身体に部分的にでも習得しているか否かが、その実践にかかわる語りの理解のあり方を規定している」(226)と指摘している。

以上が本書の概略である。第3章から第4章の土器づくりの技術的実践に関する記述は、土器づくりに熟知しない者が読んでも十分に理解できるものとなっている。また、第5章から第6章の機織りに関する記述では、従来の機織りの技術が外から影響を受け、織布の種類や織機が変容していることや、布を織る目的も、自家消費から、様々な「商品」の販売

へ、と変わりつつあることが、本書を通じてうかがえる。

著者は、ビラ村の土器づくりは、「技術の斉一性が非常に強く、製作者ごとの偏差がほとんどみられない」(114)と指摘している。一方で、土器づくりと身体に関連性については、本書以外に金子守恵著『土器づくりの民族誌—エチオピア女性職人の地縁技術』(2011)がある。金子は、エチオピア南部のアリ社会でおこなわれている土器づくりを「地縁技術」や「文脈化」という概念によって技法の習得過程を捉えている。金子によると、アリの土器づくりの技法は多岐にわたり、「職人一人ひとりが自分のづくり方の独自性を主張して、常に独自の手指の使い方によって土器をつくっている」(金子 2011: 76)と説明している。

評者が調査を行ってきたエチオピア北部の機織りに目を向けると、一見、どの織工も同じに見えるが、作業の進行具合や織りあがった布の品質は大きく異なる。これは、織作業の際に、ヨコ糸を1本ずつ手で打ち込んでいくことから、均等な間隔でヨコ糸を打ち込むためには熟練した技術が必要となることと関連している。この熟練した技術は必ずしも、作業経験年数＝熟練度となるわけではない。わずか数年機織りに従事した織工でも均等な間隔で布を織り上げることができる者がいる一方で、20年以上機織りに従事しても、均等に布を織ることができない織工もいる。このように、エチオピア北部の織工のあいだでは、織り作業に個人差があり、それが布の品質として他者から評価されている。エチオピアで土器づくりの技法や機織り作業に個人差があるように、手仕事によるものづくりは、必ずしも同じとは限らない。

コルディリエラ地方で実践されている土器づくりや機織りなどの民俗工芸も、ある製作者たちが同じ道具を使い、同じ師から同じように技術を伝授されたとしても、個々人の技術的実践には何らかの差異があつてしかるべきだろう。このような個人差は、本書でいうところの先天的な生理現象として捉えられるのかもしれない。しかし、本書ではその身体技法における個人差をどのように議論に取り入れるのか。

織機には、ヨコ糸を打ち込むための道具やタテ糸を偶数列と奇数列に一斉に開口させるための道具など、機織りには欠かせない主要構成部品がある。これらの部品は織機の形態をはじめ、地域や民族によって異なる。例えば、腰機では、ヨコ糸を打ち込むための道具として、刀状を呈した刀杼とうじょが使用される。タテ糸を一斉に開口させる道具としては、「中筒なかづつ」と「強撚糸製のソウコウ」が用いられることが多い。本書に掲載されている機織りの写真(141、165)を見る限り、コルディリエラ地方の腰機もこれと同様のものであると考えられる。一方で高機では、ヨコ糸を打ち込むための道具としてオサ、タテ糸を開口する道具として金属製のソウコウを使用することが多い。なお、本書の中で、著者は腰機を在来織機と表記しているように、腰機は製作者の身体を織機の一部としながら機織りをおこなう。これに対して、高機は腰機の発展型であり、製作者が織機から完全に独立したものである。このことによって、製作者は、腰機よりも高機の方が効率よく織作業をおこなうことができる。

織布の製作工程も同様に、地域や民族、織布に使用する素材によって差異がある。しかし、タテ糸の整経(タテ糸の長さや本数をそろえる作業)や機仕掛け(整経したタテ糸やオサ、ソウコウなどの織機の主要構成部品を機枠に設置する作業)など、機織りには欠かせない準備作業がある。

さて、評者が携わったエチオピアでの土産物開発では、対象となる住民たちがそれまで実

践したことの無い新しい機織りの技術を導入し、新たな文様やかたちを試したことがあった。しかし、新しい技術を習得するには従来の機織り技術を習得するよりも多大な時間が必要であったり、意図が十分に通じなかったりすることがあった。また、土産品を製作する他の訓練所では、新しい織機や機織りの技術は習得したものの、織機や織技術の変容により新しい土産品の意匠を考えることができない、といった新たな問題も生じている。

本書の機織りに関する項では、技術の習得過程や外からの影響による織機の変化、それぞれの工房に関する記述が取り上げられている。そのため、機織りに従事する織工の社会的背景や外からの影響による織布の変容については十分に捉えることができる。しかし、上記したような機織りの作業工程や道具に関する詳細な記録はやや説明不足な印象を受ける。また、腰機から高機へと移行した際のそれぞれの機織りの作業工程やその変化、新しい織機を導入した際の製作者の技術の受容過程についても十分に触れられていない。このように織りの技術を細かく、かつ包括的に観察することにより、本書がテーマとする技術的实践についてさらに知見を深めることができると考える。

ただし、作業工程や道具の詳細な記述や個人差への配慮などが欠けているとする評者の指摘は、決して本書の評価を下げるものではない。物質文化研究のなかでも、身体の実践という新しい論考を補完するためのファクターとして捉えていただければ幸いである。

本書は、フィリピンのルソン島で実践されている土器づくりや機織りについて、観察者としての立場からだけでなく、実作者としての経験をもとにして分析・検討がなされている。また、従来のものづくり、特に技術誌を扱うような研究では十分に捉えられてこなかった技術的实践という視点から論が展開されている。このような論考は、土器づくりや機織りに限らず、技術が社会に及ぼす影響を捉えるうえでも非常に重要な指標となるのではないかと考える。本書のような技術的实践を追求するアプローチは、今後、物質文化研究を志す者、あるいは技術を研究対象とする者にとっては、欠かせない一冊となっている。

参考文献

金子 守恵

2011 『土器づくりの民族誌——エチオピア女性職人の地縁技術』、昭和堂。

吉本 忍(編)・柳 悦州(作図)

2013 『世界の織機と織物』、国立民族学博物館。